



「農学国際協力」誌のインパクト力

緒方 一夫

農学知的支援ネットワーク運営委員長／九州大学熱帯農学研究センター・教授

本誌前号（14巻）の巻頭言で、編集長の石川智士氏は「いかなる雑誌も、読みたいと思っていただける読者がいて初めて存在する意義があり…、一方で、この雑誌に論文を投稿したいと思う会員がいなければ、やはり継続的発行は難しい」と述べている。実は、筆者らはバングラデシュでICTを利用し農民所得向上を目指したプロジェクトを実施し、その内容を本誌第13巻で紹介した。するとその記事を読んだ方から何件かコンタクトがあり、詳しい内容を教えて欲しいとのこと。これは「農学国際協力」誌が生んだネットワークの例である。

学術雑誌/学術論文にはインパクトファクター（IF）という指標がある。IFはもともと図書館情報学の一領域である計量書誌学（ビブリオメトリクス）において考案されたもので、学術誌/論文が当該領域へ与える影響を引用の頻度から測るというアイデアに基づいている。しかしながら引用を計測する根拠となるジャーナルは限られており、本誌はいまだその地位にはないが、目指すべきはIFをもつジャーナルなのだろうか。

投稿をしようとする者にとって、自らの論文をなるべく多くの人に読んでもらい、科学界にインパクトを与えたいと思うのはもっともなことである。しかし、国際協力に関与しているのは学术界に限らない。農学国際協力は営為であり、アクションを引き起こすことが、本当のインパクトではないだろうか。

雑誌をめぐるのは、投稿者というアクター、読者というアクターに加え、もう一つのカテゴリー、編集者というアクターがいる。ジャーナルを運営する立場からは、当該の雑誌に掲載された記事がどれだけ読まれているのかが気になるであろう。本誌の編集は他に本業をもつ研究者のボランティアとして行われている。したがって、編集作業に利用可能な時間は限られている。そのような制限条件のもとで、質の高い記事を掲載するという業務をこなさなければならない。ボランティアとしての作業をささえているのは国際協力に対する使命感と達成感であろう。編集担当の方々には毎回頭が下がる思いである。

農学知的支援ネットワーク（JISNAS）は農学国際協力の知と経験の共有を目指している。そのためのツールの一つが「農学国際協力」誌なのである。「あの雑誌にはよい記事がでる」という評判を得るためには、よい投稿者、よい読者、よい編集者が必要なのである。一編の論文が、人の活動を促すことがある。農学国際協力の分野で行動を促す。そんなインパクトをもつ雑誌であってほしいと願う。